
Dreame Researcher

音無声無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D r e a m e R e s e a r c h e r

【Nコード】

N 9 1 5 4 Z

【作者名】

音無声無

【あらすじ】

突然、魔法と関わり合うことになってしまった男が、夢を叶えるために努力する話。

俺の日常

「ふっ、またつまらぬものを切ってしまった……………」

俺の後ろには俺が切り捨てた男が倒れている。

男はピクリとも動かず。

床は赤い液体に濡れている。

「龍斗、お前が悪いんだ」

手に持った得物を腰に収める仕草をしながら言う俺の声は震えていた。

怒りとそれを遥かに超える悲しみに

「お前が！ お前が！ 俺の楽しみにしていたアニメのネタばれなんから！！ だからこうなる！」

「いやいやいや、海斗が持っている筈だから！ 龍斗もノリノリでトマトジュース撒き散らしながら倒れたけど、海斗、君が持つてるのただの筈だから！！」

「何を言う達也！ 達人の手にかかればただの筈で鉄が切れる！ なら俺の手にかかれば龍斗程度造作もない！」

しかし、そう言いきった俺の背後から俺に絶望をもたらす言葉が聞こえた。

「その後、エイトはキングを新必殺技ファントムクラッシャーで倒したのだ」

まさか、まさかそれは！

「そしてエイトは無事にエリス姫を助け出した」

「龍斗、貴様あ！ アルカディアサーガ12話の最後までネタばれするとは、覚悟はできているんだろっな」

振り向いたそこにいたのはついさっき俺が斬鉄剣（ただの筭）で切り捨てたはずの龍斗だ。

「覚悟？ それをするのは貴様だ、海斗。俺は忘れてはおらんぞ。

先週貴様が俺の大好きな魔法戦隊ガントレットを馬鹿にしたことを！！！」

何を言い出すかと思えばそんなことか

「あんなものを好きな貴様の精神を疑うわ！ 何だあれば！ 正義の味方なんて自称してるくせにやることと言ったら、魔法で数十人に分身して1人か2人の悪役を数の暴力で袋叩きにするという、正気を疑う内容だろうが！！ あれが子供向け特撮アニメとして放映されているのを見て俺は大好きな翠屋のシュークリームを吹き出すはめになったんだぞ！ どうしてくれる！」

週に1回しか食べることでできない、あの翠屋のシュークリームが無駄になったときのあの絶望を俺は忘れない。

「んなこと、知るか！ それに確かにあのアニメは悪役のイケメン

達がなんとかガントレットに勝とうと修業をし、新たな技を編み出して、むしろ悪役側が主人公っぽいが、それでも！ イケメンをフルボッコにするという1点において、あいつらは俺達の正義の味方なはずだ！！」

「くっ」

反論できん。

イケメンは敵だ。

確かにそれは俺たちにとって完全なる真理だ！

だが、だが！

「だが、あのアニメは辛い現実を直視させてくるだろうが！ 脚本家は何考えてんだよあれは！ ガントレット側が悪役を撃退する毎に、はじめはこちら側だったヒロイン達が必死にガントレットの物量に勝とうとしている悪役を見て、次々悪役側に惚れて敵側に寝返っていくとか、ほんと何考えているんだよ！ 一応悪役側は人類の殲滅なんてしようとしてんだぞ！ あれか、イケメンは正義だとも言うつもりか！？」

「確かに、そのことは俺も辛く思っている。だが、それでも俺はあのアニメが好きなんだ。きっと、きっとガントレットはイケメンに目にも物を見せてくれると信じているから！！」

龍斗の叫びが教室に響く。

龍斗の言う通り、最終的にガントレット側が勝つなら俺にとっては問題はない。

イケメンは死ねばいい。

しかし、あのアニメ、最終的にはヒロイン達が悪役側を改心させて
終わりそうな雰囲気なんだよな。

そうなれば絶対ガントレット側は空気と化す。

そんな光景は見たくない。

「だから海斗、俺の好きなアニメを馬鹿にするな！」

俺と龍斗は教室の真ん中で睨み合う。

一歩も譲ること無くお互いの顔を睨みつけ合う。

このままでは埒が明かん。

「龍斗、男が譲れないものがある時にやることは1つだ」

「そうだな」

俺と龍斗は同時に構える。

龍斗は漫画 F i r s t S t e p の真似をしてボクシングの構えを、
俺は手に持っている斬鉄剣で居合いの構えを取る。

もちろん意味などない。

鞘もないのに居合い抜きはできない。

だがモチベーションは上がる。

先に動いたのは龍斗だった。

「いくぞ、海斗！」

一気に左足から踏み込みながら、左腕でジャブを放ってくる。しかし、そんなものは全く怖くない。

「龍斗、愚かなり」

俺は焦ることなく斬鉄剣を振り抜く。

素手の龍斗と筭をもった俺とでは俺の方がリーチが長いのは当然だ。だから、龍斗のジャブは俺には届かず、俺の振り抜いた斬鉄剣は龍斗の身体を切り裂く。

「くっ！」

俺の一撃を受けた龍斗は追撃を避けるために机の間を縫うようにして距離を離す。

ちっ、俺の位置からだとかと机と鞆が邪魔で行き難い場所に逃げやがったな。

だが、その位置はお前にとっても不利な位置だ！

斬鉄剣を片手で持ち、その長いリーチを生かして机越しに龍斗に斬りかかる。

それに対して龍斗がとった行動は簡単なものだった。ちよつと後ろに下がる。ただそれだけだ。

だが、ただそれだけで俺の一撃は龍斗に届かなくなる。

攻撃を避けられたせいで身体が泳いで隙ができる。

しかし、間に机がある以上龍斗が即座に反撃に移ることはできない。

必ず机を迂回知る必要がある。

その間に俺は態勢を立て直せばいい。

そう俺は思っていた。

だが、龍斗は俺の想像を遥かに超える行動に出た。

「俺はすずかちゃんに告白するまで死ねない!!」

なんと奴は死亡フラグを叫びながら、机を飛び越えてドロップキックをしてきやがった!

くっ、此処は俺も死亡フラグを叫びながら何かやるべきか?

そんな馬鹿なことを考えていたせいで避けることもできずに俺は龍斗のドロップキックをくらい、龍斗と一緒に倒れる。

くっ、中々いい一撃だ。

だが俺は負けん!

素早く龍斗から身体を離し立ち上がるのと龍斗が立ち上がるの同時だった。

そして、俺は龍斗の後ろを見てしまった。

やばいぞ死亡フラグ、さすがだ死亡フラグ、仕事振りが半端ないな。

「龍斗よ、死亡フラグというものを知っているか？」

「もちろんだ！　だが、俺はこの程度の死亡フラグ程度乗り越えて見せる！！　いや、すずかちゃんに告白するまで死んでたまるものか！！」

やべえ、やべえぞこれは、マジで龍斗が死ぬかもしれん。

奴は気づいていない。

自分の死がすぐそこに迫っていることに

すまん龍斗、土下座をしておくから許してくれよ。

だが、土下座した俺を見た龍斗のセリフは俺の考え得る限り最悪のものだった。

「ふっ、俺のすずかちゃんへの愛の勝利だ！！」

龍斗お前は気付かなかったのか？

教室にいる皆がお前に送っていた、止めるこのままでは死ぬぞ！！
という視線に！

「えーと、あの、そのなんというか気持ちは嬉しいんだけど、その………」

勝ち誇っていた龍斗の顔から一気に血の気が引いて行き、汗がただらと流れ始めているのが分かる。

龍斗の首が油の切れたブリキ人形のような速度で後ろに回っていく。

やめろ、止めるんだ、龍斗！

今後ろを向けばお前は死ぬぞ！

そう言いたかったが、俺の口は動かなかった。

龍斗が振り向いたその先にいたのはアリサ・バニングスと高町なのは、そして龍斗が盛大に告白すると宣言した月村すずかだった。

凍りつく空気、教室にいる人間の誰も動けない。

「えーと、いや、その、あのな」

しどろもどろになって見れたものじゃないが、俺には見届ける義務がある。

この事態の責任一端は俺にあるんだからな。

..... 決して面白そうだからという野次馬根性ではない。決してだ。

当事者の2人は共に慌てふためいて「あの、その」ばかりで碌に会話にもなっていない。

誰かが割り込んで収集をつけるべきだ。

誰もがそう思っている。

だけどそれと同時に誰もがそんな役割はしたくねえ、とも思っている。

だから誰も動かない。

そう思っていたのに動いた奴がいた。

奴の名はアリサ・バニングス、このクラスきつてのツンデレだった。しかし今この瞬間奴は勇者にジョブチェンジしやがった！

「あーもう！ まどろっこしいわね！ あんた、男なんでしょ！？
しゃきつとしなさいよ！！」

すげえ、凄過ぎるぞアリサ！！バニングス。

こんなに初々しく青春している2人の間に割り込むなんて常人には
絶対出来ねえ。

漢おっしだよあんたは

これでこの龍斗教室告白事件は終わった。この教室にいた誰もがそ
う思ったはずだ。

だが、教室の皆の予想を遥かに超えて龍斗は漢おっしを魅せた。

「……………ああそうだな。漢おっしならしゃきつとしないとな」

「えっ、ええそうよ？ 男ならしゃきつとしなさい！」

バニングスも龍斗が本当に自分の言葉通りにしゃきつとするとは思
っていなかったのだろう。

その声に隠し切れない動揺が出ていた。

まあ俺もバニングスに至近距離で凄まれて怯まなかった龍斗はすげ
えと思う。

俺の知る限り同年代でバニングスに凄まれて怯まなかった奴は他に
は1人しかいないからな。

「俺、武田龍斗は月村すずかのことが大好きです！ 付き合ってください！！」

すげえ、すげえよ龍斗！

お前の月村に対する好意は知っていたつもりだったけど、それは知っていたつもりでしかなかったんだな。

精々アイドルに対する憧れみたいなもので、この衆人環視の中開き直って告白する程にまで月村のことが好きだとは思ってなかった。というかお前に惚れている女子から俺は相談受けてたりするんだが、どうすりゃいいんだろうな。

まあそれについてはひとまず考えないようにしておこう。それより目の前の問題を解決することが重要だ。

ほら、月村を見てみるよ。

顔真っ赤にして俯いちまってるじゃねえか。

2人の間にも沈黙が落ちただただ時間だけが過ぎていく。

体感時間では1時間経ったような気もしたが、時計を見ればまだ2分も経っていない。

少しでも早くこの空気を終わらせたいが、龍斗の本気を見せつけられた俺にはこの空気をぶち壊すことなど到底できない。

だが、勇者は違ったようだ。^{バニングス}

「アンタた、むぐっ」

何か言いかけたバニングスに駆け寄り咄嗟にその口を手で塞ぎ。

龍斗と月村の傍から引き剥がし、呆然と立っている高町の傍まで下がる。

「つつ！」

口を塞いでいる手が噛まれたが我慢するんだ俺！

俺の悪友の一世一代の舞台の邪魔はさせねえ！

俺とバニングスが音も立てずに揉み合っているうちに月村も覚悟を決めた様だ。

真っ赤になっている顔を上げ、途切れ途切れではあるが返事を紡いだ。

「その…ごめんなさい…私はまだ誰とも付き合っ気はないんです…」

その言葉を受けた奴の目からは汗が溢れていた。

あれは断じて涙などではない！

男は泣かない。

だから目から零れるあれはただの汗だ！

「……そうか、きちんと、返事をしてくれて、ありがとう」

途切れ途切れで鼻声になっていたがそれは聞こえない振りをするんだ。

龍斗はそれだけ言うと教室から出て行った。

俺はバニングスの口を塞いでいた手を離し、奴が出て行ったドアに向かって敬礼した。

英雄には最高の敬意をもって接すべきだ。

そう思ったのは俺だけでは無いようで、教室にいる男子全員が龍斗が出て行った扉に向かって敬礼している。

バニングスが何か喚いているが無視だ。

中々に強力なパンチが腹にめり込む。

……無視するんだ。

ローキックが打ち込まれ体がふらつくが無視するんだ！

股間に向けて蹴りが来ているが無視……出来るか……！！
全力で後ろに下がり何とか蹴りを避ける。

「バニングス！ お前はやって良い事と悪い事の区別がつかんのか
！？ 股間はアウトだろ股間は……！！」

「あんたが無視すんのが悪いのよ！ それにあんただって私の胸揉
んでたじゃない……！！」

「はっ！ 存在しない胸は揉めん！ 寝言は寝て言え！」

小学3年生に胸などあるものか！
見事なまでに絶壁だろうが！

「そこまで言っただんなら……覚悟は良いわね？」

怖ええ。

なんで小学3年生の女子のくせしてこいつは何でここまで怖ええメ

ンチ切れんだよ。

家は相当な金持ちだという話だけど、実はマフィアの娘だったりするんのか？

だが俺に退く気はない。

こいつにはやって良いことと悪いことがあることを体に教え込んでやる！

..... 負けました。

完膚なきまでに負けました。

殴りかかっても受け流され、カウンターの拳が腹にめり込み。バニングスの攻撃は面白いくらいに俺に直撃しまくりました。

現存ずたばろです。

教室にいる皆からの憐みの視線が辛かったから5時間目の授業をぶ

つちぎって屋上で黄昏てます。

「世の中無情だよな」

「本当にそうだな」

ここには俺と同じく黄昏ている奴もいるから、傷ついた俺の心を癒すのに丁度いい。

「告白したお前は振られるし、女に全力で殴りかかった俺は返り討ちだぞ。ほんとやってられないよな」

「いや海斗、女子に本気で殴りかかったお前に同情する余地はないと思うぞ？」

裏切り者め。

「だが、それにしてもバニングスのやつ実はゴリラかなんかじゃないんだろ？ あ的身體であの威力を出すなんてとても人とは思えんのだが」

本当にあれは俺たちと同じ人間なのか？

俺も同年代の野郎どもとはよく喧嘩しているが、バニングスほど強烈なパンチを打ってくる奴にはあったことが無かった。

「普段の行動見ているとそうは思えないけど、バニングスもいいとこのご令嬢みたいだから護身術かなんか習ってたんじゃないのか？」

「そうかなー、そうだいいなー。素で女子に喧嘩で負けたとかなれば立ち直れんかもしれん」

後でバニングスに護身術かなんか習ってるか聞くことにしよう。

「それでさー、失恋した気分ってどんなものよ？」

多少無神経だと思いが俺が一番聞きたかったことを聞くことにした。

「……………海斗、失恋するとは予想以上にショックを受けるものなんだな。泣いている間は悲しかったけど、泣き終わった今は果然自失というかなんとというか、何もする気が起きない」

「燃え尽きたわけか」

「そうかもしれないな」

そんな会話をしていた時にチャイムが鳴った。

さて聞きたいことは聞いたし、ホームルームに出て帰るとするか。

「龍斗、お前ホームルームには来るか？」

「いやいいわ。もう少しここでぼーっとしてる」

龍斗は俺の問いに振り向くことなく答えると、再び空を見上げてぼーっとしだした。

早く失恋から立ち直れよ悪友。しんゆう

その為の切っ掛けは作ってやるからさ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9154z/>

Dreame Researcher

2011年12月28日21時59分発行